

武蔵野日曜集会

キリスト者の生活指針

――ロマ書第12章――

1978年11月19日(武蔵野)

小池辰雄

クリスチャンの在り方 有機体的な体 孟子の四端 至誠 浩然の気 三つの焦点 キリスト
の中に入ること

【ロマ12・1～21】

1 されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧む、己が身を
神の喜びたもう潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり。2 又この世
に倣うな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを弁え知らんために
心を更えて新たせよ。

3 われ与えられし恩恵によりて、汝等おのおのに告ぐ、思うべき所を越え
て自己を高しとすな。神のおのおのに分ち給いし信仰の量にしたがい慎み
て思うべし。4 人は一つ体におおくの肢あれども、凡ての肢その運用を同じ
うせぬ如く、5 我らも多くあれど、キリストに在りて一つ体にして各人たが
いに肢たるなり。6 われらが有てる賜物はおのおの与えられし恩恵によりて
異なる故に、或は預言あらば信仰の量にしたがいて預言をなし、7 或は務あ
らば務をなし、或は教をなす者は教をなし、8 或は勧をなす者は勧をなし、
施す者はおしみなく施し、治むる者は心を尽して治め、憐憫をなす者は喜び
て憐憫をなすべし。9 愛には虚偽あらざれ、悪はにくみ、善はしたしみ、10 兄
弟の愛をもて互に愛しみ、礼儀をもて相譲り、11 勤めて怠らず、心を熱くし、
主につかえ、12 望みて喜び、患難にたえ、祈を恒にし、13 聖徒の欠乏を賑し、
旅人を懇ろに待せ。14 汝らを責むる者を祝し、これを祝して誼うな。15 喜ぶ
者と共によるこび、泣く者と共になけ。16 相互に心を同じうし、高ぶりたる
思をなさず、反って卑きに附け。なんじら己を聴しと為な。17 悪をもて悪に
報いず、凡ての人のまえに善からんことを図り、18 汝らの為し得るかぎり力
めて凡ての人と相和げ。19 愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒に任せま
つれ。録して『主いい給う、復讐するは我にあり我これを報いん』とあり。
20 『もし汝の仇飢えなば之に食わせ、渴かば之に飲ませよ、なんじ斯するは
熱き火を彼の頭に積むなり』21 悪に勝たるることなく、善をもて悪に勝て。



●クリスチャンの在り方

ローマ書12章は、一番深いまた豊かな意味での人間性をパウロが語っているところです。クリスチャンの在り方としてこれ以上の答案はない。ローマ書12章はそういうところだと思つて、むしろ暗記するくらいに憶えてください。

「されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧む、己が身を神の喜びたもう潔き活ける供物として献げよ、これ霊の祭なり。」

第1節は非常に力強い節ですね。今まで異邦人ならぬユダヤ人に対してかなり大きな問題で語ってきましたが、「そういうわけだから」と、この「ウーン」という字がこの「されば」ということです。ドイツのある註解者が、「デア グローセ ウーン」「非常に大きなされば」と、書きました。

われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧む

古い訳にこの「慈悲」という言葉が出てくるので、非常になつかしい言葉です。仏教的な言葉ですけども。神のいろいろな深い顧みによりて汝らに勧めるんだがと。神の深い同情心です。

己が身を神の喜びたもう潔き活ける供物として献げよ

もちろん、「潔き」とはキリストの血によつて潔められたことです。我々が自ら手放しに潔くなるのではない。キリストの贖罪によつて潔められた、ある意味において聖別された、そういった活きた供え物として献げよと。「供え物」というのは、ユダヤの宗教は犠牲の宗教ですから、動物にしろ穀物にしろ、そういった神に献げるもの、献げ物として献げよと。

これ霊の祭なり。

と。どうして、こんな訳が出てきたかと思うんですが。「霊」というような言葉ではない。「ロギケー」という字ですから、「ロゴス」という字と同じで、「道理にかなつた」ということ。「神の道にかなつた祭、奉仕」ということ。しかし、「霊の祭」というのは非常にうがつた訳として捨てがたいような気持ちもしますけれども。

又この世に倣うな、

もちろんその通りです。この世のいろんな時代精神、時の世の流れ、時流に流されるなど。日本なんかもこの時流に流されることが非常に多い。普通のことでも流行に流されたりしている。普通の世の中の風潮に従うなど。

又この世に倣うな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを弁え知らんために心を更えて新たせよ。

この場合の「心」は「ヌース」という字が使つてある。「変ずる」「メタモルフォーゼ」という字があるでしょ。「メタモルフォーマイ」という字ですが、心を変えて、古びないような本当の新しいもの、質のちがった新しいものにしない。でなければ、神の御意に本当に悦ぶことにはならない。いうまでもなく、新生、新しく生れた心ですね、新生によると



ころの心。

³ われ与えられし恩恵によりて、

パウロも自分の与えられた恵みに、即ち、使徒たる、使徒職という恩恵によって、
汝等おのおのに告ぐ、思ふべき所を越えて自己を高しとすな。

この「べき」という字がまた強い字です。そのようにどうしても思わなくてはいけない、
思ふべき所を越えて自らを高しとするなど。ここでも、低姿勢でいるということなのです。

神のおのおのに分かち給ひし信仰の量にしたがい慎みて思ふべし。

「信仰の量」というような言い方は、ちよつとへたすると躓きますけれども。その信仰の強
弱にしたがつて慎みて思ふべしと。アンバランスのことにならないのがこの「慎みて」と
いう字です。平均がとれたという字です。

●有機体的な体

⁴ 人は一つ体におおくの肢あれども、凡ての肢その運用を同じうせぬ如く、

これは、コリント前書7章、12章にも似たような言葉があつたと思ひますけれども。

⁵ 我らも多くあれど、キリストに在りて一つ体にして各人たがい肢たるな
り。

それぞれの役割がある。それぞれの能力、いろいろな質がある。みんな違う。だから、
適材適所ですな。適材適所にあつて、そしてそれが全体の有機体的な体となつていく。キ
リストを首として動けと。これがエクレスシアの本当の構造です。また、エクレスシアに限らず、
人間の社会というものはそういうものなんです。悪平等は決してよくない。人間の人格は
どれも、神の前には平等です。けれども、その役割となつたらいろいろあるわけです。い
ろいろあるけれども、役割の上の者とか、下の者とか、そういったものを品定めすること
はひとつもいらん。位置はいろいろですけれども。そういうことで、キリストに在つては、
どの役割でもそれぞれ絶対に必要な役割ですから。指一本でも怪我すれば、身体全体が痛
むと同じように。

⁶ われらが有てる賜物はおのおの与えられし恩恵によりて異なる故に、或は

信仰の度合いでね。「預言」というのはよく一番先に出てくる。

⁷ 或は務あらば務をなし、

いわゆる「ディアコニス」(奉仕)式なもの。

或は教をなす者は教をなし、或は勧をなす者は勧をなし、

いろいろ役割があると。年の上の人が、長老格の人が勧めをしたりする。

施す者はおしみなく施し、

財力のある人、



治むる者は心を尽して治め、

そういつた統制的な才能のある人、

憐憫をなす者は喜びて憐憫をなすべし。

これは病める人たち、苦しんでいる人たちを、霊的な能力で憐れむような面も入っているわけです。

9 愛には虚偽あらざれ、

愛は、絶対に偽善的であつてはいかんと。

悪はにくみ、善はしたしみ、¹⁰兄弟の愛をもて

「フィラデルフィア」という言葉がまさに「兄弟愛」です。

互に愛しみ、礼儀をもて相譲り、¹¹勤めて怠らず、心を熱くし、

熱心にね、

主につかえ、¹²望みて喜び、患難にたえ、祈を恒にし、

大事な項目を一つずつ畳みかけて言っている。

「祈りを恒にし」

は特に大事です。常に祈り心で、どこでも祈れる。電車の中でもどこでも。目を閉じれば密室となるから。

13 聖徒の欠乏を賑し、旅人を懇ろに待せ。

ルカ伝のあのサマリヤ人みたいに。

14 汝らを責むる者を祝し、

逆に祝し、

これを祝して詛うな。

むしろ、「アナテマ」となれ、「呪われたもの」となれというわけです。

15 喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になけ。¹⁶相互に心を同じうし、高ぶり

たる思をなさず、反って卑きに附け。

もうなにも説明はいらん。

なんじら己を聴しと為な。

キリストも自分をちつとも聴しとしなかった。

17 悪をもて悪に報いず、凡ての人のまゑに善からんことを図り、

全部、善意でね。善意が大事だと。

18 汝らの為し得るかぎり力めて

全力を尽くして、

凡ての人と相和げ。

全方位外交みたいに。まあこれは外交ではないけれども。

19 愛する者よ、自ら復讐すな、



癪にさわるることがあってもね、

ただ神の怒に任せまつれ。

神の審判に任せろと。「怒り」は審判と言っても、義と言ってもいい。

録して『主いい給う、復讐するは我にあり我これを報いん』とあり。

申命記32章です。

20『もし汝の仇飢えなば之に食わせ、

上杉謙信と武田信玄の間みたいだな。

渴かば之に飲ませよ、なんじ斯するは熱き火を彼の頭に積むなり』

箴言25章の言葉です。相手が恥じらうことです。

21悪に勝たるることなく、善をもて悪に勝て。

まあ、畳みかけて、非常に一つ一つ、内容のあるものを、もうこれ以上なにも言えないくらい、パウロは12章で実存の具体的なことを畳みかけて言ってしまったわけです。

この項目を一つずつ暗記して憶えて、「さあ、そいつを実行しよう」としたって、それは無理です。そういうやり方ではやっぱり、律法になっちゃいます。ある一つのポイントをつかむと、そうするとこれが全部——人間だから、楽にできるとは言いませんけれども——それを悦びできるようになり、また、せざるを得なくなってくる。「べし」「べからず」ではなくて、そのように自然になっていく。また、ざるを得ないと。そういう角度にならないければ、福音でないですから。でないというところ、パウロのこの言葉を律法的に受けとったらダメです。そこは間違わないように。

●孟子の四端

私は中学・高等学校の生徒に『この道を往く』（1973年刊 獨協学園図書館リンドンバウム叢書2）という小冊子を書いた。その中に孟子の「四端」という言葉をあげた。それが今、パウロの言ったところと関わりがある。

「惻隱の心なきは人に非ざるなり。」

羞惡の心なきは人に非ざるなり。

辭讓の心なきは人に非ざるなり。

是非の心なきは人に非ざるなり。

惻隱の心（思いやり）は仁の端なり。

羞惡の心（恥じらい）は義の端なり。

辭讓の心（へりくだり）は礼の端なり。

是非の心（わきまえ）は智の端なり。」

仁、義、礼、智。もう一つ入れたいのが「信」なんです。そこは孟子の言葉にはない。もし言うならば、私は「畏敬の心」と言いたい。



「畏敬の心は信の端なり」

と、これはまあ私が付け加えた。

「敬天愛人」

と南洲が言いました。「敬天」は、神仏に対する畏敬の念。人助けが「愛人」です。このローマ書12章をみると、私が普段言っている西郷南洲の「敬天愛人」は――「敬天」は一番深い意味においては信仰ですから。畏敬の心。信。これが土台です――この四つをつかんでいる。その土台が霊です。

南洲が非常に尊敬した佐藤一斎（1772～1859）という儒学の大先生がいる。その『言志録』という本の中から、南洲は自分でもって大事な句を選んで、修養の言葉にした。その中からまた大事な言葉を皆さんにご紹介します。

「凡そ事を作すには、須らく天に事ふるの心あるを要すべし。人に示すの念あるを要せず。」

何でも仕事をするのは、これは天に仕える、神さまに仕える。仕事することは神に仕えるので、人に仕えているのではないんだと。人に見せるためではない。天に仕える。だから、南洲はどこか別なところで、

「天を相手にする」

と言ったのはそのことです。神を相手にする。私たちの相手は、神さま、キリストだということ。

●至誠

それから、時々私が引用しますね。これは至誠、偽りなき誠ということと言った詩です。

「雲煙は已むことを得るに聚る。」

風雨は已むことを得るに洩る。

雷霆は已むことを得るに震つ。

斯に以て至誠の作用を觀る可し。」

これが人間の至誠の作用である。「ざるを得ない」気持ちで動くのが誠なんだと。「こうしようか、ああしようか」なんてなことを考えているうちはダメだ。それがちょうど大自然の動きと同じような具合に、心がもう止むに止まれざる必然で動くのが本当だと。それは勉強でも何でもそうですよ。必ず力が出てくる。ざるを得ない在り方、これが至誠だと言う。そして、

「自ら鍛えて息まざるは天道なり」

「自ら鍛えてやまず、これ天道なり」と書いてある。これは愉快的言葉だね。自ら律し自ら強めるという、「自律自彊」と私は高等学校の生徒の第三項目に書いたが、その「自彊」という言葉はそこから来ている。「自ら鍛える」も、天道となると、私は「自ずから鍛える」



と言いたくなる。自然に自分を鍛えることになる。そして、自然にそれは止ま^やないんです。「これでいい」なんていうところはない。

「^{おの}自^{つと}ずから^や彊^{つと}めて息ま^やざる、これ天道なり」と言いたいくらいです。

「一燈^{ひつぎ}を提^ひげて、暗夜^{ひつぎ}に行く。暗夜を憂^{うれ}うる勿^なれ。只^{ただ}一燈^{ひつぎ}を頼^{たの}め。」

ただ一燈を頼^{たの}んで、どんなに暗い所でもそれで歩^{ある}めと。燈火^{ともび}一つ。私^{わたし}たちにとつては、

「我^{われ}は光^ひなり」

という、キリストという一燈で、もうどこでも歩けるとい^いわけだ。

● 浩然の氣

それからまた、愉快な言葉がある。

「浩然^{こうぜん}の氣^きの如^{ごと}きは、專^{せん}ら運用^{うんぎん}を指^さすも、其^{その}の実^{たい}太極^{たいぎよく}の呼吸^{こそく}にして、只^{ただ}是^{これ}れ一誠^{いちじやう}なり。之^{これ}を氣原^{きげん}と謂^いつ、即^{すなは}ち是^{これ}れ理^りなり。」

「太極^{たいぎよく}の呼吸^{こそく}」というのは、天地の極^{はて}に至^{いた}るまでの大氣を呼吸するとい^いう、そんな氣持^{きもち}ちで使^{つか}っている。「氣原^{きげん}」は氣^きの原^{もと}。元氣^{げんき}を出^だせとい^いう、氣^きの元^{もと}。太極^{たいぎよく}を呼吸するようなところ^{ところ}に本^{ほん}当^{とう}の「氣原^{きげん}」がある。我^{われ}々の持^もっているところの本^{ほん}当^{とう}の氣原^{きげん}がある。それは私^{わたし}たちがこの聖靈^{せいれい}を呼吸^{こそく}しだすと、この氣原^{きげん}の世界^{せかい}に入^いるわけ^{わけ}です。

非常に宗教^{しゆきやう}的な角^{かく}度^どの言^ご葉^はがある。

「^{みづか}自^{かえり}ら反^なみて縮^おきは、我^{われ}無^なきなり。千^{せん}万^{まん}人^{にん}と雖^{いえど}吾^{われ}れ往^いかんは、物^{もの}無^なきなり。」

自分^{自分}を顧^こみてま^まつすぐであるならば、無^な我^がである^{こと}と。本^{ほん}当^{とう}の無^な我^がとい^いうのは、無^な我^がの境^{きやう}地^ちになると、「^{みづか}自^{かえり}ら反^なみて縮^おき」とい^いう。凝^{ぎやう}縮^{しゆく}して^{いる}んだな、これは。「千^{せん}万^{まん}人^{にん}と雖^{いえど}吾^{われ}れ往^いかん」とい^いうその現^{げん}実^じはこの無^な我^がから出^でてきて、そうすると、相^あ手^てはもう全^{ぜん}然^{ぜん}問^{もん}題^{だい}にな^らないから、無^な物^{ぶつ}である^{こと}と。昔^{むかし}の人^{ひと}はや^やつぱり、氣^き魄^{はく}が違^{ちが}うね。こ^こうい^いうものを読^よんだ方^{かた}が^いい^いんだよ、本^{ほん}当^{とう}は。

「心^{こころ}無^なきに心^{こころ}有^あるは、工^く夫^{ふう}是^こなり。心^{こころ}有^あるに心^{こころ}無^なきは、本^{ほん}体^{たい}是^こなり。」

我^{われ}々は心^{こころ}が有^あるんだけれども、それを心^{こころ}が^ないと、無^な心^{しん}の境^{きやう}地^ちに入^いったとき^{とき}に、それ^{それ}が「本^{ほん}体^{たい}」である^{こと}と。その通^{とお}りです。

「人^{ひと}心^{しん}の靈^{れい} 太^{たい}陽^{やう}の如^{ごと}く然^{しか}り。」

人^{ひと}の心^{こころ}の中^{なか}にあるところの靈^{れい}は、太^{たい}陽^{やう}の如^{ごと}く、お天^{てん}道^{だう}さんのごとく然^{しか}り、とい^いう。「然^{しか}り」と非^ひ常^{じやう}に断^た定^{てい}して言^いっているわけだ。全^{ぜん}く太^{たい}陽^{やう}の如^{ごと}きものだと。我^{われ}々は「靈^ひ止^と」、神^{かみ}靈^{れい}の止^とま^まつて^{いる}境^{きやう}地^ちが、「人^{ひと}心^{しん}の靈^{れい} 太^{たい}陽^{やう}の如^{ごと}く然^{しか}り」とい^いうこと^{こと}です。それは聖^{せい}靈^{れい}が止^とまれば、聖^{せい}靈^{れい}が来^きればま^まさにその境^{きやう}地^ちはわ^わかる。

聖^{せい}靈^{れい}の世界^{せかい}に来^きれば、なにか違^{ちが}つてくるから。病^{びやう}氣^きがと^とつつかない。風^{ふう}邪^{じゃ}ひか^かない。そ^そうい^いうこと^{こと}になる。私^{わたし}は、



「先生の健康法は何ですか」

なんて聞かれると困る。

「別にやってません。まあ、今でも泳ぎますが」

くらいのことを言っているけれども、本当はそんなことではないんだ(笑)。時々、

「上から力が来るんですよ」

なんて言いますけれどもね。

●三つの焦点

今、南洲だとか、佐藤一斎の『言志録』だとかの言葉を多少引用したけれども、要するに、今引用したような言葉は単に道德の徳目を言っているのではない。みんな、気魄のある言葉です。パウロのローマ書12章も、パウロは実に懇ろに我々の日常生活の指針として言っていますけれども、やっぱり、焦点があるわけです。一つの焦点を結べば、そこにパウロが言っているたくさん言葉がそこにずつと集まってくるわけだ。

では、どこに焦点があるんですか。焦点は、ただ一つというわけにいかないかもしれない。しかし、二つか三つあるが、そいつが一つの焦点に重なり合う。私は読んでいて、

「祈りを常にし」

というこの「祈り」、そこが一つの焦点です。クリスチャンの生活の魂が祈りの魂にならないかったならば、これはダメ。これがないと、信仰の信が本ものにならない。

「信ずることと祈ることは一つである」

というようなことはルターも言ってますから。その通りです。

それから、どこでしょうかね。隠れた焦点が一つある。それはこの言葉の中にないんだけれども、隠れている。

「悪に勝たることなく、善をもて悪に勝て」

とあるでしょ。それは善悪だから、パウロはそう言ったろうけれども。もう一つ奥に、

「愛をもて一切に勝て」

と言いたいわけです。「愛をもて」と。悪どころではない。「愛で一切に勝て」と。これはヒルティが、

「アモール オムニア ヴィンキット」(愛は一切に勝つ)

という言葉が好きで、あれが墓碑銘になっている。

もちろん、この中心は――そこにも「愛」という言葉が他にも出てますから――

「汝ら、責める者のために祈れ」

だとか、

「低きにつけ」

だとか、



「己を高くするな」

だとか、みんなこれはどん底でしょ。どん底の立場に立つのは愛なんです。担いの愛。この祈りと愛です。ここにはパウロは聖霊のことは何も書いてない。そのことが、パウロがちよつと抜けているんだよな――抜けていると言つてはわるいけれども――「兄弟の愛」だとか、そんなことを言っているけれども。

そこで実はもう一つ大事な焦点がある。最後に私が言いたいのは、これは隠れていない、ちゃんとある焦点がある。どこにあるかな。第5節、

「⁵我らも多くあれど、キリストに在りて一つ体^{からだ}にして各人^{おのおの}たがい^{えだ}に肢^{えだ}たるなり。」

と。

「キリストに在りて一つ体である」

という。

「エン・クリスト」「キリストの中に」

ということ。これが一番真ん中の中心なんです。

「キリストに在る」

という。私たちの魂がキリストに在ると、これは全く御霊の世界ですから。「キリストに在る」ということが本当であるためには、この聖霊が来てなければ、「キリストに在る」ということは言えない。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

というのは、キリストの御霊が、御霊のキリストが――何と言つてもいいですよ――それは祈り入らなければ、入れない。祈り入らなくては。

また、キリストの愛を本当に受けなければ、その愛が本ものにならない。キリストに祈り入ること、また、キリストからの愛が来ること。これが「キリストに在る」ということ。

「祈り」

「愛」

「キリストに在る」

という、この三つの言葉でもって私はそれを集約したいわけです。

そうすると、パウロがここで言っていることは全部、その項目は全部、これをもつてちゃんと掴^{つか}むことができる。この焦点がないと掴めない。バラバラでもつて、「こうしよう、ああしよう」としたつて、それはくたびれてしまう。新しい律法^{おきて}になつてしまう。

●キリストの中に入ること

祈りをもつてキリストの中に入ること、祈り入ること。もちろん、祈り入るためには十字架を通らなければダメですよ。十字架を通らなければ、入っていくことはできない。十



十字架抜きに入っただって、それはいわゆる直接性的な神秘主義になる。十字架の贖いを通るから、私たちはキリストの中に入って行けるんです。手放しでは入れない。十字架と聖霊は絶対に離せない。

キリストの中に入る。そうしたらもう、どうしたって、そこからキリストの愛が来る。これはもの凄い力を持っている。相手を担うし、責め呪うやつを逆にこっちが祈ってやれるし、旅人を懇ろにできるし、偽りない愛が来るし、もうここに書いてあることが全部、すーっと溶けてしまう。だから、バラバラに

「こうやろう、ああやろう。パウロはその次に何と言ったかな」

なんて――私みたいな記憶のわるいやつはすぐ忘れてしまうけれども――自分でもってパウロの言ったことを今度は逆にあみだすことができる。本当ですよ。ローマ書12章くらいは私だって書けますよ、この世界に入れば。入らなかったら、書けない。

そういうことで、ローマ書12章も焦点を結んで掴まえる。学校の勉強だってそうですよ。一体、どこに焦点があるか。そこからどういうように枝葉ができていくのか。そういう見当の仕方で必ず力が出てくる。

これがローマ書12章ということ。5節、

「**我らも多くあれど、キリストに在りて一つからだにして各人おのおのたがいにえだ肢たるなり。**」

と。それぞれのつぴきならない役割を果している。他人ひとをうらやむことも、けなすことも何もない。みんなそれぞれ、神さまから一人びとりがのつぴきならない分担を賜っているわけです。

そういう考え方がないから、日本では何でも「大学卒でなければ」なんて、もう大間違いだね。もうたくさん専門学校や実業学校を作って、それぞれの才能に合うようなところへ行くようにすればいい。どうしてこう、日本人というのは、本当のフィロゾフィーレン（哲学する）ができないのかね。本当のフィロゾフィーレンの多くは結局、ちゃんと聖書に基づいている。

ここにも知の面、情の面、意志の面、みんないろんなものが出てくる。それがちゃんと本当に聖霊の世界から統括できる。そして、健全な理性も、健全な感情も、健全な知識も自在に展開していく。そういう構造になるんです。だから、本当の信仰がなんと素晴らしいものであるか。普通のクリスチャンでもそこまで考えがいてないですよ。これは是非とも、私は今度の『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻 1982年刊）で徹底的に展開するつもりだから。

